



Title	吸血鬼の棺
Author(s)	菊竹, 智之
Citation	臨床哲学のメチエ. 2014, 21, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/40505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

吸血鬼の棺

菊竹智之

私が中学に通い、そして通わなかつた街には、モノレールが走つてゐる。そのまた新しい駅に、顔を出したばかりの朝日が差し込んできている。まるでその光から逃れるかのように、私は、駅の隅つこの薄暗いトイレによく座つていた。

或いはちよつと大きなバスターーミナルの椅子に。或いは大きな本屋とかそのトイレ。或いは、或いは…。別に、トイレが好きな訳じやない。バスターーミナルだつて。でも私は確かに、家でも学校でもなく、しづちゅうこの薄暗い場所にいたのだ。

◆ ◆ ◆

中学生の私には「鬱病」という言葉の意味もよくわかつていなかつたけれど、とりあえず「精神の病」であるということだけわかつていて、そしてそれは「狂人」とかそういうつたイメージと結びついていて、だからわたしは医者に「鬱病だ」と告げられた時、激しく困惑し、否定した。「自分の心は病んでなどいない。自分は学校に行きたいけど体が弱いせいで行けないだけなのだ」。そう思つていて。思つていたかった。「普通」でありたかった。だから、私が病院にきちんと通院し続けることはなかつた。わたしに治すべき病などないのだから。

私は中学二年のある時期から、学校に行かなくなつた。いじめられていたとかそういう特別な出来事があつたわけではない。通学の疲れ、体の弱さ、成績の落ち込み、クラス替え、兄の不登校と復帰、色々なことが重なつて、それはきっと、たまたま起つた。

だからわたしは駅のトイレにこもつたし、バスターーミナルで昼寝をした。「学校に行きたい自分」を信じてい限り、毎日毎日家にこもつてゐることは出来ない。学校に行きたいのに家すら出ないのはおかしいから。だか

ら時々は朝どうにか家を出て、そうした場所で時間をつぶしてから家に帰った。そうすれば、「学校に行く努力

はしたが途中でしんどくなつて引き返したのだ」という言い訳が使えた。それはきっと、親や教師への言い訳である以上に、自分への言い訳だつた。

だからだろうか、バスターーミナルの硬い椅子で、私は、家でサボつて寝ているよりもちよつぴり気持ちよく眠れた。誰も私へ顔を向けることのないこの場所では、私が学校に行かないことを咎めたり悲しんだりする人はいない。私は静かな闇に埋没できる。

親や教師の「当たり前の生活を送らせたい」というそ
のありふれた善意は、善意であるが故に私を包囲した。

もし誰かが私を苦しめようとして、それで学校に行かせ
ようとしているのならば、いつそ私は立ち向かえたかも
しれない。だけど、そういうわかりやすい悪役は私の物
語には登場してくれなかつた。彼らは、悪役の使う枷の
代わりに、私を見つめながら抱擁をする。私は、その拘
束具を壊すこともそれから逃げることもできなかつた。



学校に行くという「当たり前」の期待は、太陽の光だつた。

それは人々の暖かい善意だつた。

だがそれは、木々に動物たちに人々に、そして土竜にも蝙蝠にも吸血鬼にも、無差別に降り注ぐのだ。

そう。わたしは吸血鬼だ。私は朝目覚めない。私は強すぎる光の下では生きていけない。日の光は、その気がなかろうと、私を攻撃する。

その光は、私の身体の隅々までを照らそうと、容赦なく侵入してくる。私のおなかの中のひつそりとした暗闇をかき消す。

学校で、家で、病院で。人々は私の何が「悪くて」学校にいけないのかを暴き、学校に行けるようにしようとした。それは全て彼らの優しさだつた。

だがその光は、私が内から発する、か細く小さな蠅燭の輝きを見失わせるのだ。私の拙い生命の主張を。

私に必要なのは私を白日の下にさらし外から暴く、光に満ちた広場ではない。暗室だ。痩せ細つた蠅燭の炎が自ら語り出す暗闇だ。朝の光は、私には眩しすぎる。



学校に行つたり行かなかったり、行かなかったり行つたり。そんな調子で断続的に四年間も続いた不登校は、「高校をやめる」という至つて単純な方法で終わりを告げた。その後に編入した定時・単位制の高校は、それなりに薄暗い場所だった。学習が過度に強要されることはないし、成績が順位化されることもなく、同級生たちと競い合うことは必要なかった。常に居るべき場所としてのクラスは存在せず、友達を百人つくることも求められなかつた。

だがまだそこには学校特有の光がある。私たちの出欠は小さなコンピュータによつて確認されていたし、放課後階段でギターを弾いていたら怒られた。大学だつて眩しい。誰ともなく就職や将来のことを問い合わせてくる。学校は学校であるというそれだけの理由で、わたしが何の気無くそこに居ることを拒んでいるかのようだ。

どこへ行つても、光はつきまとつてくるのかもしけない。

◆ ◆ ◆

そうだ。吸血鬼の私は、自分のために棺を創つて、そこで寝ていよう。その棺には伸縮性があつて、蓋には小さな隙間が開いている。生ぬるい暗闇を求める者は誰でもその隙間から入つてくると良い。どうか懐中電灯だけは持ち込まないで。

そうしてあたりが薄暗くなつてきたら、眠つた街で踊ろう。吸血鬼の棺は、ずっと寝るためではなく、そのためにあるのだから。

さあ、朝が来るまで、棺をつくるための素敵な材料と素敵な職人を探しに出かけよう。

夜は短い。これだけは肝に銘じておいて。

きくたけ ともゆき

大阪大学文学部倫理学専修。いくつかの場所で対話や表現活動の探求に取り組んだり取り組まなかつたりしている。